

指定校番号	28005	学級活動	児童会・生徒会活動	○	学校行事	別紙様式
-------	-------	------	-----------	---	------	------

平成 28 年度生徒指導集中対策指定校及び生徒指導実践指定校 「特別活動の取組事例」

学校名	広島市立真亀小学校	校長	水迫 壽則	生徒指導主事	原田 裕
-----	-----------	----	-------	--------	------

取組事例名 『たてわり班活動』

取組のねらい 『人の喜びを素直に喜ぶことのできる子どもを育てる』

たてわり班活動の通年導入により、異学年交流をもち児童同士の関わり合う場を広げる。また、主に高学年の児童に関しては、人の役に立つ喜びを味わわせ、自己肯定感を育て、低学年、中学年の児童に関しては、高学年の児童を憧れに感じて、見習おうとする気持ちを育てる。

取組の具体的内容 『関わり合う楽しさが感じられる活動』

5月 (顔合わせ&班遊び)
これから一緒に活動していくメンバーを知り、班遊びを行って、これからの活動に期待を持たせる。



6月 (たてわり班転がしドッジボール大会)
体育委員会企画のもとで転がしドッジボール大会を行い、各班で協力したり、声をかけ合ったりして、たてわり班の仲をさらに深める。



6月 (非行防止教室)
小学生に多い非行をテーマにした教員の劇を通して、「何がいけないのか」「どうすれば良いのか」ということを各班で意見を出し合う。



2月 (卒業おめでとう集会)
サブリーダーの5年生を中心に卒業おめでとう集会を行い、今までリーダーとして引っ張っていったくれた6年生に感謝の気持ちを伝えるとともに、たてわり班活動の1年間を振り返る。



7月 (平和集会)
計画委員会企画のもとで平和集会を行い、平和の歌を歌ったり、鶴を折ったりする活動を通して、平和について各班で考える。



9月 (たてわり班ゲーム大会)
たてわり班ゲーム大会を行い、各班で協力したり、声をかけ合ったりして、たてわり班の仲をさらに深め、自己有用感を高める。



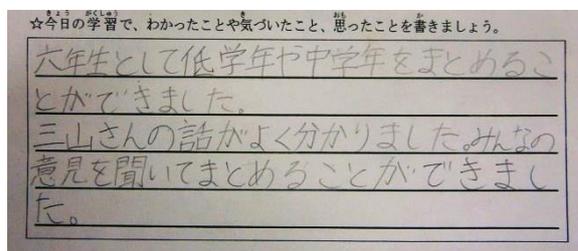
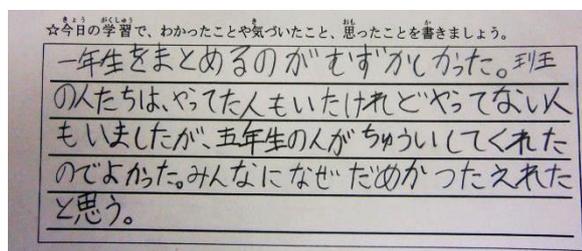
10月 (運動会でのたてわり班競技)
運動会の中でたてわり班競技を設けて、改めて協力の大切さやたてわり班活動の楽しさを味わわせる。



取組の課題・創意工夫 『集団支援的アプローチと高学年リーダー』

本校には、発達障害等特別支援教育的課題のある児童、問題行動や不登校等生徒指導的課題のある児童、両方の課題が重複している児童と、様々な実態の児童が混在している。また、自己有用感が低かったり、人間関係力が未熟であったりする児童の実態があるため、中学校区の「めざす子ども像」の一つに「豊かな人間関係を作ることができる子ども」を挙げている。これらのことから、児童個々の実態やニーズに合った適切な支援とともに、人との関わりを通じた活動が求められている。そこで、学校全体に目を向け、全児童への支援（集団的アプローチ）として、望ましい関わり合いを通して、自己肯定感が得られる行事・活動である通年のたてわり班活動を導入している。

なお、たてわり班活動がより良い活動になるためには、高学年の存在、特に六年生が必要不可欠である。それぞれの活動前には、学年や委員会を通して、事前に意識づけを行っている。活動によっては、事前学習会を行う等もしている。（例えば6月の非行防止教室では、当日使用する教材を事前に6年生に実施し、当日のデモンストレーションを行う。事前に学習をすることが、当日下午級生に声かけをする際の手助けになっていた。）



一方、課題としては、振り返りの仕方が学校全体として統一されていない時があることである。児童にとって振り返りは、たてわり班活動のねらいに迫る大事な活動であり、それによって自分の中で「何が良かったのか」「どんな考えをもったのか」を価値づけていくことに繋がっていく。また、教員にとっては、児童一人一人の想いを知ることができ、今後のたてわり班活動の充実につながっていく。活動に合わせた振り返りの仕方を全校で統一することが必要なのではないかと考えている。

取組の成果（効果）『役立ち感と憧れ』

異学年で活動することを楽しみにしている児童が多く、たてわり班活動以外でも声をかけあう様子が見られる。高学年は、下級生への声かけや班をまとめる活動を通して、責任感や自己有用感を得られており、下級生はそんなリーダーのことを慕い、積極的に関わろうとする様子が見られる。また、協力する活動だけでなく、班で考えたり、感じたりする活動もあるので、たてわり班での関わりがより深まっている。特に、6年生と1年生の繋がりが強く、たてわり班活動をきっかけとして日頃の交流がさかんになっており、学年同士での交流活動にも生かされている。たてわり班活動での人間関係が他の場面でも生かすことができるような取組になっていることが感じられた。

今後の展開『振り返りの充実とねらいの再検討』

年々とたてわり班を中心とした活動が増えているので、それに伴って、きちんと振り返りを行うことが大事だと考えられる。感想カードを書かせたり、それを全体の場で紹介したりする等の方法で、たてわり班活動での学びを通して、自己有用感や達成感として残るようにしていきたい。また、高学年は自分の役目があり、低学年は高学年をお手本に頑張っているが、中学年に対する視点が少し弱い。各学年の発達段階を踏まえ、たてわり班活動における各学年のねらいを再検討していきたい。

他校へのアドバイス『リーダーとしての見通し』

6年生がしっかりしていると学校全体が落ち着いた雰囲気になることを今年度は特に感じた。たてわり班活動で、6年生が下級生に声をかけている様子を見ていると、とても良く頑張ってくれているなど思う。この活動を通して、自己肯定感や自己有用感が得られているから、一生懸命に頑張ろうとするのではないだろうか。活動はしたけれども、何も得ることが無かったとなってしまうと、リーダーの自己有用感には繋がらない。そこで、6年生がリーダーとして活動しやすいようにすることが重要である。本校では、6年生に対して、各活動の度に事前学習を行っている。これにより、まず、活動のイメージを持つことができる。活動のイメージを持つことで、不安感の解消や活動への期待感に繋がる。次に、リーダー自身がたてわり班活動のねらいを理解した上で、本番の活動に臨むことができる。たてわり班の活動にはねらいがあり、それをリーダーが理解することで、本番、自分がどう行動すれば良いのか考えることができる。最後に、たてわり班活動を行うためには、6年生の存在が必要不可欠であることを知ってもらうことができる。6年生は学校にとって、特別な存在であることを知ってもらうことで、たてわり班活動を一生懸命行うことに喜びを感じてもらえるようになる。このようにリーダーとしての見通しを持たせることが、たてわり班活動の充実に繋がると考えている。